



新作能「シーサ」作／演出：Amparo Adelina Umali 三世、後シテ梅若 猶彦

研究テーマ

グローバル時代における日本文化発信力強化研究
～日本の文化における交流媒体としての能～

目的・概要

能を媒体とした日本文化発信力強化の方法を探ることを目的に、関連分野の研究者と能楽師が共同で研究を進め、平成26年2月にフィリピン大学国際研究センターにおいて国際会議「日本の文化外交における交流媒体としての能」を開催した。能と西洋演劇を専門とする本学教員2名がこれに参加し、研究発表を行った。併せて、文化交流活動の一環として、本学梅若教授の指導のもとにフィリピン大学学生による新作能「シーサ」の上演を行った。

期 間

平成25年4月～平成26年3月

研究担当者

(芸術文化学科) 梅若猶彦教授、高田和文教授

スケジュール

- 2013.4 ↓ 調査研究開始、国際会議及び新作能上演の準備
- 2014.2 ↓ フィリピン大学国際研究センターにおける国際会議及び新作能上演

- 2014.2.5 新作能「シーサ」の通し稽古
- 2014.2.6 日本研究の学生に笛の指導、仕舞、謡の技術指導、新作能「シーサ」通し稽古
- 2014.2.7 笛の指導、仕舞、謡、新作能の指導
- 2014.2.8 Payatas の子供達(シーサの地謡に参加)と共に通し稽古
- 2014.2.9 新作能「シーサ」ゲネプロ、会議発表者との会場(Aldaba Hall)での打ち合わせ
- 2014.2.10 国際会議「日本の文化外交における交流媒体としての能」、新作能「シーサ」上演



高田副学長とフィリピン大学総長



ト部駐比日本大使講演



Alfredo Pascual フィリピン大学総長

研究 成 果

本研究は単年度の事業ではあるが、その前提として2005年以来約10年間に及ぶ本学とフィリピン大学国際研究センターとの協力・信頼関係が存在していた。従って、今回の国際会議も、本学及び同センターの双方の協力によって実現したものである。さらに、筑波大学、日本女子大学他の研究者、国際交流に関わる能楽師や外交官が参加し、多方面からこのテーマに取り組んだ。外務省海外交流審議会答申(H20.2)、文化庁文化発信戦略に関する懇談会報告(H21.3)は、我が国の対外文化政策の重要性を謳っているが、今回の国際会議では、それらの具体化の方向について貴重な提言がなされた。

筑波大学は数年前より東アジア、中央アジア、ヨーロッパで学術ネットワークを形成し、日本文化の国際共同研究を行っているが、その一環として本学と協力してチュニジア、カルタゴ・フェスティバルにおける能「隅田川」上演、新作能「ハンニバル」上演(作:サラ・ハンナシ元駐日チュニジア大使、演出:梅若猶彦)を実施し、日本文化発信力強化について考察を深めてきた。その筑波大学の研究と本研究を統合することで、サントリー文化財団の「人文科学、社会科学に関する学際的グループ研究助成」を獲得した。

今 後 の 研 究 成 果 の 還 元 方 法

- 1 発表内容を報告書として英語/日本語の2か国語でフィリピン大学出版から刊行する。(配布資料参照)
- 2 日本文化発信力強化の具体化を、本学、フィリピン大学の連携に加えて、筑波大学との連携によって3大学が足並みを揃えて行う。